自然人のための本箱

川を考える

野田知佑
藤門弘

岩波書店

川を考える

野田知佑／藤門弘

岩波書店

川を考える　自然人のための本箱

一九九二年一〇月八日　第一刷発行©

定価一五〇〇円
（本体一四五六円）

著者　野田知佑
藤門弘

発行者　安江良介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
発行所　株式会社　岩波書店
電話 〇三-三二六五-四一一一（案内）

印刷・製本　法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-004089-8

目次

憂国対談なのである　藤門　弘　1

第一部　熊本県菊水にて——川を考える　9

第二部　北海道余市にて——川を考える　65

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第三部　東京にて——川を考える　129

オン・ザ・ウェイ　野田知佑　207

憂国対談なのである

藤門弘

日本は世界で一番金持ちで、しかし世界で一番貧しい国である。
急激に金持ちになってしまって、その金をどう使っていいか分からず、開発の名のもとに国中をこわしまくっている度しがたい「遅れた先進国」である。
これが野田知佑とぼくに共通する見解である。彼に言わせれば、
「日本人はサルである」
ということになり、ぼくに言わせれば、
「サルがヒトになるにはあと百年必要だ」
ということになる。
この対談は本来、「日本の川を考える」というあたりがテーマなのだが、実はこれはわれわれが最も話したくない話題なのだ。
日々破壊されていく国土について、これ以上なにを言えばいいのか、われわれは途方に暮れるのである。あえて言葉を重ねながら、どうしようもない無力感を覚え、いきつく先はいつもこの国をどう脱出するか、というあたりになってしま

う。

われわれはどちらも青春前期に長い旅をし、それをひとつの転機としている。あの時旅から帰ってきてしまったのが失敗だったな、という苦い思いがどこかにあって、子供たちはもうどんどん外国へ放り出してしまおう、と話しあう。海の向こうの話は尽きないが、目を自分の国に向けると途端に口ごもってしまう。

とても日本の川についてゆっくり語り合う気分ではないのである。

とはいえ、彼もぼくもひとまず日本に住み、ブルドーザーに乗ったサルの皆さんに囲まれて生きている。否、否、と言いながら日々を送らざるをえないのである。そんな毎日に疲れた時、われわれは海の外に旅に出て、大きく深呼吸する。この深呼吸の旅はいまや重要な生存の条件になっている。

というあたりが正直なところなので、与えられたテーマはいささか方向を転じて、「日本の川を嘆く」というトーンに終始することになった。だから、もしかすると読む人にとって、面白いとか楽しいとかいうものではないかも知れない。しかし、これはやむをえない帰結なのである。

もしいま、日本の川について楽しそうに語る人がいたら、われわれはその人物

の感性を疑わざるをえない。圧倒的な破壊の片隅に残った情緒を取り上げて昔を懐かしむ、ぐらいがせいぜいできる楽しい話なのである。

あるいはまた、外国の、それも西欧諸国のいい所を多数挙げて日本と比較する、というあたりが目につくかも知れない。これもまたやむをえない。海外各地の自然や人々に触れる機会を持てば、誰でも日本の現状との落差に驚き、愕然とするに違いない。

地球規模の汚染や破壊が大問題であることは十分承知しているし、その実態の端々を目にすることも多い。しかし、国家的規模で猛然と破壊を続ける国は、どう見ても日本しかないのである。

日本人であることが恥ずかしい、と野田知佑は言う。するとぼくもまたすっかりそういう気分になってしまう。

世界を旅し、人々と交わり、語り、考え、読み、書き、膨大な体験を背景に持つ彼のひとことひとことから、ぼくは大きな影響を受けるのである。

彼と知りあったのはずいぶん前のことだが、長い間ずっと師と仰ぎ、最大の敬意を持って接してきた。独立不遜の我儘な生き方をする中で、野田知佑との出会

いはぼくにとって非常に大きなものであった。

近ごろでは、ふと気付くと彼の言葉で話している、ということもある。だから、この対談は、いわば師弟対談のようなものである。

しかしもちろん、彼とぼくの間には共通するものと同じぐらい異なっている部分がある。

彼の精神に一貫する反骨、気骨は、ぼくの場合には子供じみた単なる反逆になってしまう。

彼の辛辣な発言はいつも背後に優しさを秘めているが、ぼくの罵詈雑言はただそれだけのものである。

彼の旅は生き方そのものだが、ぼくは定点生活をし、その間に旅をはさんでいるに過ぎない。

彼は少年たち全部を愛し、大きな影響を与えているが、ぼくはせいぜい自分の子供に対してしか本気になれない。

彼はシェークスピアを学んだ基礎の上で堂々たる英語を話すが、ぼくは旅行英会話ぐらいで異国の社会に切りこもうとする。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

彼は原書で欧米の小説を読むが、ぼくは技術書以外の洋書は読まない。

つまり基本的に格が違っており、この師弟関係は永遠にそのままの位置を続けるのだろう。そんなぼくを、彼は時として親友と呼んでくれ、対等な友人のように付き合ってくれる。ぼくは彼にたいへん感謝をし、嬉しく思っている。

という位置関係にあるわれわれが、日本の川や自然についてあれこれ語り合うと、このようなものになる。時と場所を移しながら対談したので、同じことを繰り返したり、ひどい時は前と違うことを言ったりしているかもしれない。

しかし、会話の底流にあるのはこの国の現状に対する絶望的な気分であり、そこに暮らす自らをどう整理したらいいのか、という迷いである。

国が大発展し、われわれの生活が飛躍的に向上したのは事実だ。そのおかげでわれわれは楽に旅をすることができるようになり、アウトドアの遊びを楽しむこともできるようになった。そういう余裕や余暇を享受しておきながら、端々のことに文句をつけるのはけしからん。もしかしたら体制を司る人々はそう言うかもしれない。

しかしそれは違う。国が豊かになった故にしなければならないことがあり、し

てはならないことがあるのだ。この豊かさの代償はあまりに大きすぎるのではないか。土建屋行政で国を目茶苦茶にしてしまったら、次の時代は一体どういうことになってしまうのか。

もの言えば唇寒し、という思いを抱きながら、われわれはあえて語った。専門家ではないから情報も分析も大いに不十分で、元来遊び人だから発言は無責任だ。しかし、言っていることは絶対に正当である。

アウトドア・ブームの世の中に、あえてわれわれの生の意見を表明して、できればこの状況を共に考えてもらいたいと思っている。

一九九一年冬　北海道にて

第一部　熊本県菊水にて――川を考える

菊池川を下る

藤門　きょうははじめてカヌーで菊池川を下ったけど、野田さんが日ごろ、「おれの故郷の川は破壊された」って怒っているでしょう。どんなすごいところになったのかなと思ってきたら、結構きれいで、ぼくは楽しかった。しかしそう言うと野田さんが怒る。そんなこと言ったら話にならないじゃないかって(笑)。それはともかく、菊池川の下り方というのを発見しました。あれは向かって左側を見て下るんですね。右側を見て下ると腹が立つ。

野田　右側は護岸工事と改修で滅茶苦茶になっているからね。北国の人から見ると南国の自然は濃厚で勢いが盛んだからびっくりしたろう。今は五月で、北海道はまだ寒いのにこちらはシャツ一枚で汗をかいてね。これが夏だと川の水が臭くて驚くよ。

藤門　北海道はまだ雪ですよ。緑の竹が印象的だったな。

野田　竹藪が残っている。さすがに竹藪には建設省も手が出ない。しかし竹藪にびっしり増

水期のゴミが引っかかっていたな。どっちを見てもぼくにとっては目に痛い。こたえる。

藤門　上流のゴルフ場開発が水が濁った原因ですか。

野田　それと、この一帯はいい山砂がとれるので、山を削ってそれを洗って売るというのが盛んなんだ。その汚泥（シルト）が川底にたまる。

藤門　そうか、あそこの堰で汚泥が沈下するから下がきれいなんだ。

野田　そう、菊水町に白石の堰というのがあるんだけど、そこの上にみんな沈殿している。水門が堰の一角にあって、それを開けるとヘドロが大量に出て、堰から下流の魚は酸欠状態になる。

藤門　大雨が降るとそのまますぐに増水する。

野田　しかも、汚れがひどい。

藤門　下りながら昔の川の護岸に組まれた石垣を見て、加藤清正がいかに偉大だったかと話したんだけど、あれはほんとですか。

野田　熊本の川の治水工事は全部加藤清正がやった。

藤門　川に斜めに出す「石刎（いしばね）」も清正が考えたんですか。

野田　そう。その「石刎」をほとんど土木事務所が取り払ってしまった。ある「石刎」——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com